

## 相談援助実習導入教育としての現場体験学習のあり方

高梨未紀

### 要旨

社会福祉士指定科目である相談援助実習指導において、現場体験学習を教育に含むべき事項として厚生労働省は定めている。しかしながら、その具体的内容や方法、位置づけなどは示されておらず、各養成校でさまざまな学習方法が検討されている。本研究は、先行研究との比較から、日本福祉大学社会福祉学部の相談援助実習入門科目でおこなわれている「社会福祉現場体験（ボランティア）」の現状を明らかにすることを通して、相談援助実習導入教育としての現場体験学習のあり方について検討することを目的におこなった。

データの収集は、「社会福祉現場体験（ボランティア）」を終えた2011年度相談援助実習入門科目履修生447人を対象にした質問紙調査によりおこなった。その結果、9割弱の学生が「社会福祉現場体験（ボランティア）」により学習意欲の高まりを感じていた。利用者との関係づくりに関して過去のボランティア経験との関連が示唆された。

7割弱の学生が体験中に困ったことがあったと感じており、その理由として最も多かったのは「なにをしたらよいかわからない」であった。「社会福祉現場体験（ボランティア）」にあたり自己課題を設定することが、現場体験学習の成果を感じることにつながる可能性がある。

そして、より効果的な現場体験学習のために必要な教育的支援として、現場体験学習を推進させる方法の検討、課題設定の見直し、現場体験学習プログラムの開発が示唆された。

キーワード：現場体験学習、相談援助実習、実習導入教育、ボランティア経験

## 1. 背景と目的

実践力の高い社会福祉士を養成するという観点からおこなわれた新たな教育カリキュラムでは、相談援助実習指導において、「現場体験学習及び見学実習<sup>1)</sup> (実際の介護サービスの理解や各種サービスの利用体験等を含む)」を教育に含むべき事項として厚生労働省は定めている。これを受け社団法人日本社会福祉士養成校協会が編集した相談援助実習指導・現場実習教員テキストでは、相談援助実習指導の展開例として、相談援助実習の前年度に、機関施設の社会福祉士による実践紹介やクラス単位の見学が盛り込まれている (川上 b2009 : 177)。ほかにも、「1 年次前期にグループで1 日ずつ2 分野の児童養護や高齢者、身体障がい者・知的障がい者・精神障がい者、救護、病院等で見学体験実習をおこなう」(鈴木 2008 : 61-64)、「3 日以上、福祉関係施設等での実践、自主企画事業・ボランティア募集事業への参加実践」(船津 2007 : 100-101) といった方法が検討されている。

では、具体的にどのような現場体験学習をおこなうと実践力の高い社会福祉士を養成することにつながるのだろうか。教育効果の高い現場体験学習をするために必要なことを明らかにするためには、現場体験学習の現状を明らかにする必要がある。

現場体験学習の現状を明らかにした研究としては、相談援助実習前年度にあたる2 年次の夏期休暇期間に、児童福祉・高齢者福祉・障害者福祉にかかわる福祉施設や機関・団体の2 か所で、40 時間以上のボランティア活動をおこない、学習記録をとり、活動への考察を深める「ボランティア体験学習」を研究したものがあつた。その丹野らの研究によると、「ボランティア体験学習」の成果としては、次の4 点が挙げられている。直接介護やケース記録を読む体験をするなど配属実習に近い体験をしている、課題設定をしてボランティアに望んだ学生の満足度が高い、ボランティア体験がその後の学びの意識を高め自己覚知に結びつく、ボランティア体験学習が配属実習先決定に役立っている (丹野ら 2004 : 133-148)。そして、丹野らの研究をふまえ、よりよい学びが得られる現場体験学習のあり方について検討をおこなつた高木 (2006 : 163-170) は、現場体験学習の教育効果として 知識と実践の統合、自己覚知などを挙げている。

筆者が所属する日本福祉大学社会福祉学部においては、相談援助実習の入門科目である「ソーシャルワーク実習基礎指導」(前期開講科目)と「ソーシャルワーク実習基礎指導」(後期開講科目)<sup>2)</sup> のなかで「社会福祉現場体験 (ボランティア)」(以下「現場体験」とする。)を実施し、次年度の相談援助実習へとつながるようにしている。現場体験は、2 年次 (3 年次編入生は3 年次) の夏期休暇期間に高齢者福祉または障害者福祉、児童福祉にかかわる施設や機関・団体での活動に2 日間以上ボランティアとして参加し、レポートを作成することを課題としている。そして現場体験の目的としては次の3 点を掲げている。次年度配属実習の前に自主的に福祉現場に触れ、実習のイメージをつかむ機会とする、児童・障害者 (児)・高齢者との関わりを通して、福祉サービス利用者および福祉実践に対する具体的なイメージをつかみ、問題関心を深める、

この現場体験を通して継続的な現場体験への足がかりとする。現場体験の目的や方法についての講義は、表1のとおり第2講目におこなわれ計画的に現場体験に取り組めるよう指導している。現場体験のレポートは、ソーシャルワーク実習基礎指導の単位認定試験として位置づけられており、次年度の相談援助実習を履修するための要件の一つとなっている。そのため、自発的におこなうボランティアとは、本質的には異なるものであるが、少しでも主体的に取り組めるよう、現場体験先の選定や実施にあたっての依頼交渉などは、学生自らがおこなうことを基本としている。そして、「現場体験先の選定」、「実施にあたっての依頼交渉」、「現場体験の実施」、「自己の体験のふりかえり（レポート作成）」、「他者の体験から学ぶ（グループメンバーとのディスカッション）」といった一連の過程を経て、社会福祉士として必要な知識・技術・価値倫理を身につけることを目指し、社会福祉士を目指す自己と向き合うことを促している。

この現場体験は、筆者が日本福祉大学社会福祉学部へ赴任する2008年4月以前から、課題名称や体験日数などを変化させながらおこなわれてきた。しかしながら、筆者の知るかぎり履修生

表1 ソーシャルワーク実習基礎指導 ・ 授業プログラム (2011年度)

科目名	講	内 容
ソーシャルワーク実習基礎指導	第1講	社会福祉専門職制度と養成教育の仕組み・実習の意義と方法、この科目のねらいと進め方、グループ編成
	第2講	現場体験の意義と方法、グループワークへの導入（自己紹介と他者理解）
	第3講	今、実習に対して感じていること（メンターから実習体験を聞き、グループメンバーで話し合う）
	第4講	現場を知る（その1） <sup>3)</sup> （ゲストへの質問作成とインタビュー準備）
	第5講	現場を知る（その1）（ゲスト講義・インタビュー）
	第6講	現場を知る（その1）（ゲスト講義・インタビューのふりかえり）
	第7講	現場を知る（その2） <sup>4)</sup> （ゲストへの質問作成とインタビュー準備）
	第8講	現場を知る（その2）（ゲスト講義・インタビュー）
	第9講	現場を知る（その2）（ゲスト講義・インタビューのふりかえり）
	第10講	実習配属先の決め方と手続きの方法【期末レポートの提出】
夏期休暇	現場体験	
ソーシャルワーク実習基礎指導	第1講	現場体験のふりかえり【現場体験レポートの提出】
	第2講	ソーシャルワーク実習のねらいと目標、実習生に求められる姿勢
	第3講	実習先ごとのグルーピング
	第4講	実習前学習の内容と方法、「志望動機書」「実習先の概況表」の書き方
	第5講	実習契約、誓約書作成の方法
	第6講	3・4年生実習報告会への参加
	第7講	
	第8講	まとめ、来年度の実習に向けて【期末レポートの提出】

の全体的な現場体験の取り組み状況について明らかにしたことはなく、その教育効果や今後取り組むべき課題について検討されていない。日本福祉大学社会福祉学部の現場体験は、丹野ら（2004：133-148）や高木（2006：163-170）の先行研究と比較して、現場体験学習をおこなう時間数に違いがあるが、学生が課題として現場体験学習に取り組む時期や取り組む場所、取り組み後のレポート作成といった点では、さほど違いがない。現場体験学習の時間数が短くても先行研究同様の現場体験学習による成果が得られるのであろうか。本研究は、学生への質問紙調査をおこなった丹野ら（2004：133-148）の先行研究との比較を通して、日本福祉大学社会福祉学部の「現場体験」の現状を明らかにし、今後必要な教育的支援を検討することを目的におこなった。

## 2. 方法

現場体験のふりかえりをテーマとしたソーシャルワーク実習基礎指導 クラス別授業（2011年9月16日）において、履修生447人を対象にした自記式集合質問紙調査をおこなった。協力の得られた402人（回収率89.9%）の回答のうち、調査票の4分の1以上の記入のないものや回答者の属性が確認できないもの計8人の回答を無効とし、394人の回答を分析対象とした。統計分析にはSPSS for Windows (Ver.20.0 J) を用いて、設問ごとに「不明・記入なし」を除いたものを有効回答とみなし、5%未満を有意水準として分析した。

調査票は、丹野ら（2004：133-148）が、大妻女子大学で2002年度社会福祉援助技術現場実習指導を履修する全員（2年生106人）に対しておこなった質問紙調査を参考に、以下の内容で構成した。現場体験の実際（施設数、施設種別、日数、時間数、体験内容、現場体験先の選択理由、情報入手先、実施にあたっての依頼方法、現場体験先を決定する際や現場体験中に困ったこと、自己課題設定の有無、利用者・職員との関係づくりに関する自己評価、現場体験の成果、社会福祉を学ぶ意欲の変化など）、基本属性や社会経験、現場体験に対する意見要望（自由記述）。

なお、研究上の倫理的配慮として、研究協力の依頼に際し、研究の趣旨について文書で説明をおこない、個人を特定したり、回答内容によって不利益を与えたりすることなく、統計的に集計、分析することを伝え、同意した場合にのみ回答するよう求めた。

## 3. 結果

### 1) 回答者の属性

有効回答394人の学年は、2年生が364人（92.4%）、3年生が30人（7.6%）で、性別は女性253人（64.2%）、男性141人（35.8%）であった。

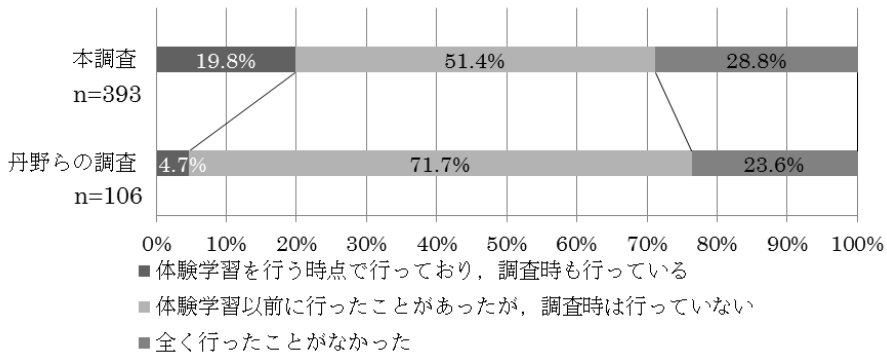


図 1 ボランティア経験の有無

(1) 現場体験以前のボランティア経験の有無

図 1 は、現場体験をおこなう前の高齢者・障害者（児）・児童とかかわるボランティア経験の有無を示したものである。丹野ら（2004：135）の調査と比較して、ボランティア未経験者の割合と、ボランティアを継続しておこなっている人の割合が多い。

(2) アルバイトや就職の経験の有無

アルバイトや就職の経験が「あり」が 360 人（91.4%）、「なし」が 34 人（8.6%）で、9 割以上の方がアルバイトや就職の経験があった。

2) 現場体験の実際

(1) 現場体験をおこなった施設の数と分野

現場体験をおこなった施設数は、有効回答 381 人中、「1 か所」が 303 人（79.5%）、「2 か所」が 75 人（19.7%）、「3 か所」が 3 人（0.8%）であった。現場体験をおこなった施設の分野は、有効回答 370 人中、「高齢者」172 人（46.5%）、「障害者（児）」118 人（31.9%）、「児童」46 人（12.4%）、「その他」34 人（9.2%）であった。

(2) 現場体験をおこなった日数と時間

丹野ら（2004：139）の調査では、99.1%の人が「4 日以上」体験学習をおこなっていたが、本調査では、有効回答 389 人中「1 日間」が 3 人（0.8%）、「2 日間」が 311 人（79.9%）、「3 日間」が 52 人（13.4%）、「4 日間」が 8 人（2.1%）、「5 日間」が 15 人（3.9%）であった。なお、本調査の 3 日以上現場体験をおこなった 75 人中 64 人（85.3%）は、1 か所で現場体験をおこなっており、体験日数の多い人が必ずしも体験施設数が多いわけではなかった。

次に現場体験をおこなった総時間数を表したものが図 2 である。現場体験をおこなった総時間数の最短が「2 時間」、最長が「81 時間」で、総時間数の平均が「14 時間 30 分」であった。

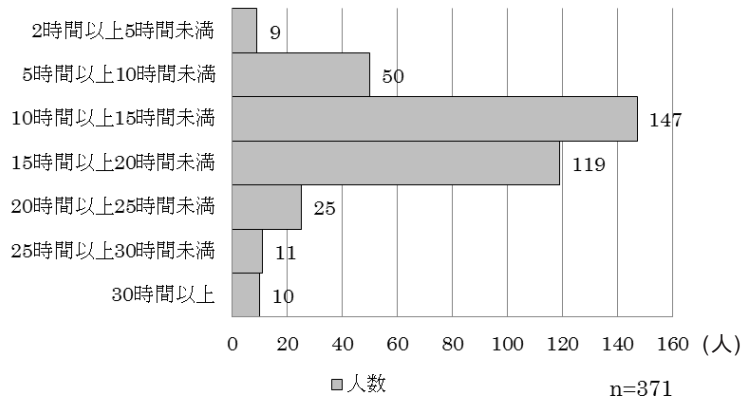


図2 現場体験をおこなった総時間数

(3) 現場体験の内容

現場体験の内容を表したものが図3である。「お祭りなどの行事の手伝い」と回答した115人中58人(50.4%)が2か所で現場体験をおこなっており、「宿泊を伴う行事の手伝い」と回答した26人の現場体験先の施設分野は、「障害者児」11人、「児童」8人、「その他」4人、「不明」3人であった。調査項目の選択肢を丹野ら(2004:139-140)の調査と一部変更したため単純な比較はできないが、「レクリエーション」と「利用者とのコミュニケーション」が上位2位までに入っていることは同じであった。

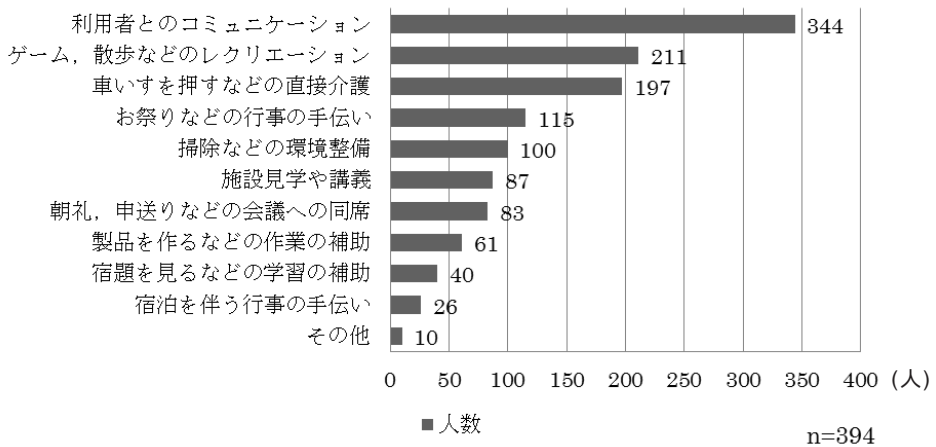


図3 現場体験の内容(複数回答)

(4) 現場体験先決定までの過程

現場体験先には、依頼の仕方により大学が学生の希望を取りまとめて依頼する「大学経由施設」<sup>5)</sup>と、学生が直接依頼する「自己開拓施設」の2種類がある。この2種類別に、現場体験先を選択した理由をまとめたものが図4である。自己開拓施設での現場体験を選択した人で最も多かった理由は、「興味関心のある分野だから」であるが、大学経由施設での現場体験を選択した

相談援助実習導入教育としての現場体験学習のあり方

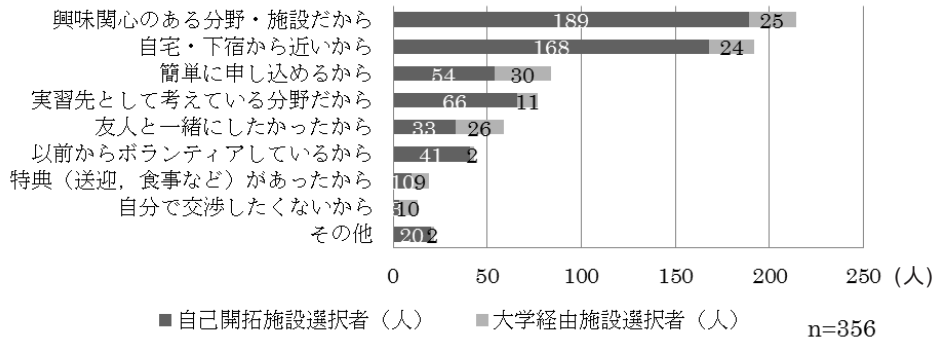


図4 現場体験先の選択理由（複数回答）

人は、「簡単に申し込めるから」であった。

自己開拓施設での現場体験を選択した325人中回答の得られた322人の情報入手先を、複数回答で求めたところ、「インターネット」100人（31.1%）、「友人や先輩などの知人」92人（28.6%）、「親、兄弟などの親族」66人（20.5%）、「市町村などの広報誌」37人（11.5%）、「ボランティア情報誌」18人（5.6%）などであった。

また、自己開拓施設での現場体験を選択した人のうち回答の得られた323人の依頼方法を複数回答で求めたところ、「電話」250人（77.4%）、「自分では交渉していない」46人（14.2%）、「電子メール」38人（11.8%）、「直接訪問して交渉した」33人（10.2%）、「手紙」と「その他」が6人（1.9%）であった。

(5) 現場体験で困ったこと

現場体験先を決定する際に困ったこと

「現場体験先を決定する際に困ったことがあった」と回答したのは、有効回答391人中、79人（20.2%）で、その困った理由を複数回答で求めたところ、27人が「日程調整が困難だった」、26人が「どのように依頼すればよいのかわからなかった」「どこですか迷ってなかなか決められなかった」、6人が「うまく交渉できなかった」「希望する施設から断られた」、2人が「その施設へ行くための交通手段がなかった」と回答した。丹野ら（2004：137）の調査では、同様の質問に対し「困った」と回答したのが16.0%で、その理由として最も多かったのは、本調査と同じく「日程調整」であった。

現場体験中に困ったこと

「現場体験中に困ったことがあった」と回答したのは、有効回答388人中267人（68.8%）で、その困った理由を複数回答で求めたところ、176人が「なにをしたらよいのかわからなかった」、132人が「コミュニケーションがとれなかった」、67人が「うまくできず自信をなくした」、55人が「その分野に関する知識がなかった」、7人が「活動内容がおもしろくなかった」、6人が「体調不良になった」と回答した。

現場体験での困ったことの有無とボランティア経験との関係

過去のボランティア経験と現場体験の関係を探るために、ボランティアの「経験あり」群と「経験なし」群に分け、比率の比較についてカイ二乗検定を用いておこなった。

現場体験先決定時に困ったことの有無別に比較すると、「現場体験先決定時に困ったことがあった」と回答した比率は、「ボランティア経験なし」群に有意に多かった ( $p < 0.05$ )。なお、「ボランティア経験あり」群が「現場体験先決定時に困ったことがあった」と回答したのは17.0%であったのに対し、「ボランティア経験なし」群は28.3%であった (図5)。

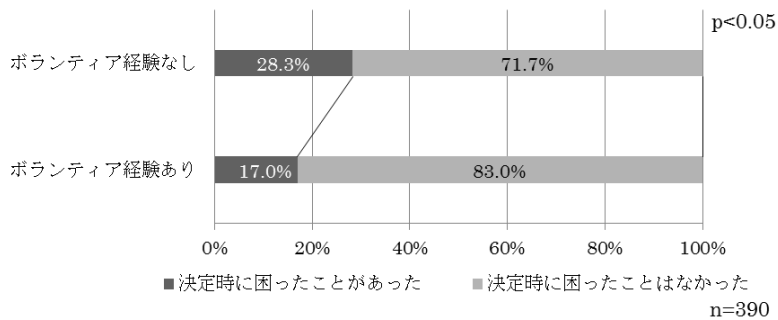


図5 現場体験先決定時に困ったことの有無とボランティア経験との関係

次に、現場体験中に困ったことの有無別に比較すると、「ボランティア経験なし」群のほうが「ボランティア経験あり」群と比較して「現場体験中に困ったことがあった」と回答した比率は多かったが、統計学的な有意差はなかった (図6)。

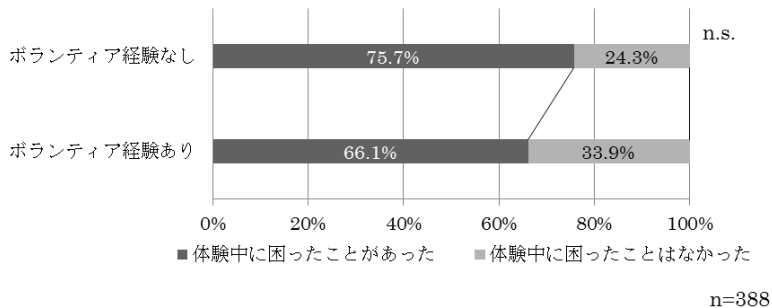


図6 現場体験中に困ったことの有無とボランティア経験との関係

3) 現場体験の感想

(1) 現場体験の自己評価

職員との関係づくり

有効回答のうち現場体験中の職員との関係づくりについて、「大変うまくできた」「うまくできた」と回答した比率は、丹野らの調査 (2004 : 143) では82.4%であったが、本調査では68.1%とかなり少なかった (図7)。丹野らは、職員との関係が「あまりうまくできなかった」と回答した学生について、ボランティア先で「自分が歓迎されていない」という印象が顕在化した結果



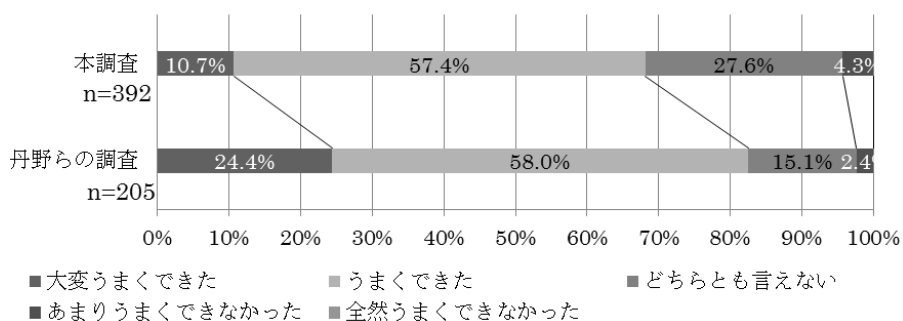


図7 職員との関係づくりの自己評価

表2 職員との関係づくりの自己評価と現場体験で受け入れられた印象のクロス集計表

(人)

職員との関係づくり / 受け入れられた印象	大変うまくできた	うまくできた	どちらとも言えない	あまりうまくできなかった	合計
こちらよく受け入れてくれた	35 16.6%	148 70.1%	28 13.3%	0 0.0%	211 100.0%
どちらかと言えばこちらよく	7 5.2%	69 51.5%	53 39.6%	5 3.7%	134 100.0%
どちらとも言えない	0 0.0%	6 15.4%	24 61.5%	9 23.1%	39 100.0%
あまり歓迎されなかった	0 0.0%	1 14.3%	3 42.9%	3 42.9%	7 100.0%
合計	42 10.7%	224 57.3%	108 27.6%	17 4.3%	391 100.0%

と分析している。本調査においても、職員との関係づくりの自己評価項目と、現場体験で受け入れられた印象の項目をクロス集計した結果、「あまり歓迎されなかった」と回答した7人中3人が職員との関係づくりについて「あまりうまくできなかった」と回答していた(表2)。

#### 利用者との関係づくり

利用者とのコミュニケーションや関係づくりについては、211人(53.7%)が「大変うまくできた」「うまくできた」と評価していたが、丹野ら(2004:143)の調査でその比率は、73.1%となっていることを考えると、本調査の結果はかなり少ない(図8)。

#### 利用者との関係づくりの自己評価と社会経験との関連

アルバイトや就職、ボランティアといった社会経験と、利用者との関係づくりの自己評価との関係を探るために、利用者との関係づくりを「大変うまくできた」「うまくできた」と回答した「関係づくりができた」と評価した群と、「どちらとも言えない」「あまりうまくできなかった」「全然うまくできなかった」と回答した「関係づくりができた」と評価しなかった群の二群に分け、比率の比較についてカイ二乗検定を用いておこなった。

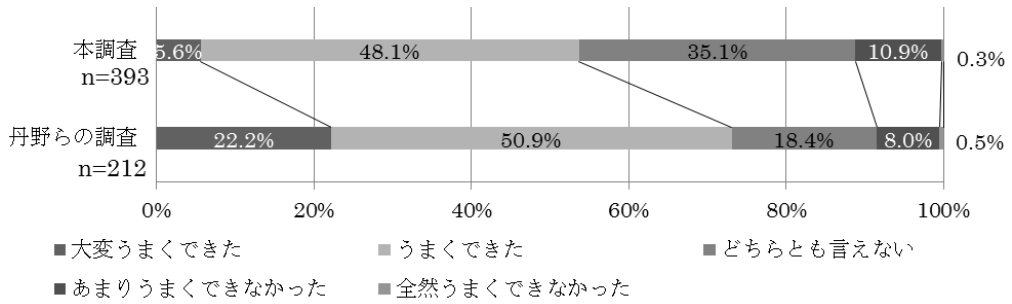


図8 利用者との関係づくりの自己評価

アルバイト経験の有無別に比較すると、関係づくりができたと評価した人の比率は、「アルバイト経験あり」群に有意に多かった ( $p < 0.05$ )。なお、「アルバイト経験なし」群で利用者との関係づくりができたと評価したのは35.3%であったのに対し、「アルバイト経験あり」群は55.4%であった (図9)。

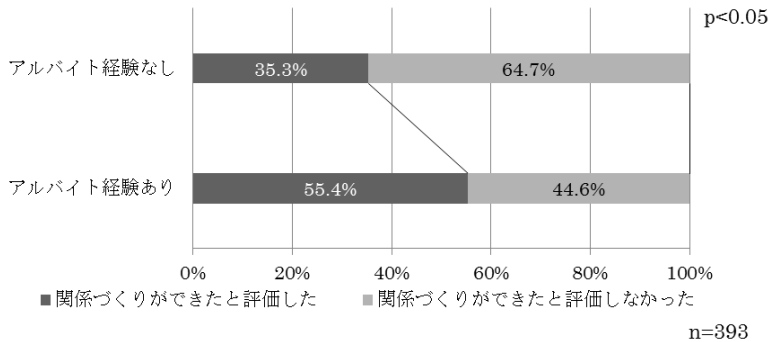


図9 利用者との関係づくりの自己評価とアルバイト経験との関係

次に、ボランティア経験の有無別に比較すると、関係づくりができたと評価した人の比率は、「ボランティア経験あり」群に有意に多かった ( $p < 0.01$ )、なお、「ボランティア経験なし」群で利用者との関係づくりができたと評価した人の比率は43.4%であったのに対し、「ボランティア経験あり」群は58.1%であった (図10)。

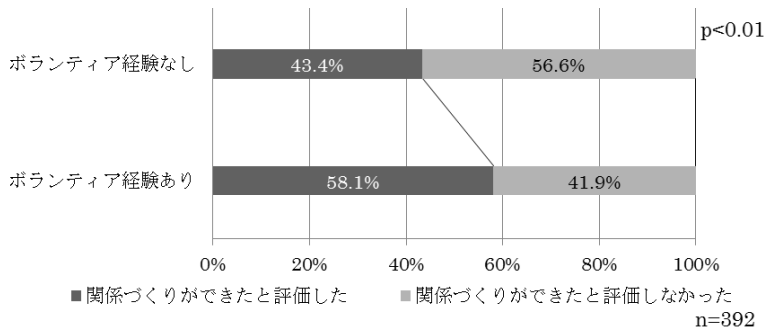


図10 利用者との関係づくりの自己評価とボランティア経験との関係

(2) 現場体験の成果

現場体験の全体的な成果

現場体験の全体的な成果を示したものが図 11 である。丹野ら (2004 : 137) の調査では「大変勉強になった」「勉強になった」と 99.1%の学生が何らかの成果を実感していたのに対し、本調査では 97.7%という結果であった。丹野ら (2004 : 142) の研究では、「課題を設定せずにボランティアに望んだ学生の満足度が低い」ことが指摘されている。本調査では、「あまり勉強にならなかった」と回答した 8 人中 5 人が「課題の設定をしなかった」と回答していた (表 3)。

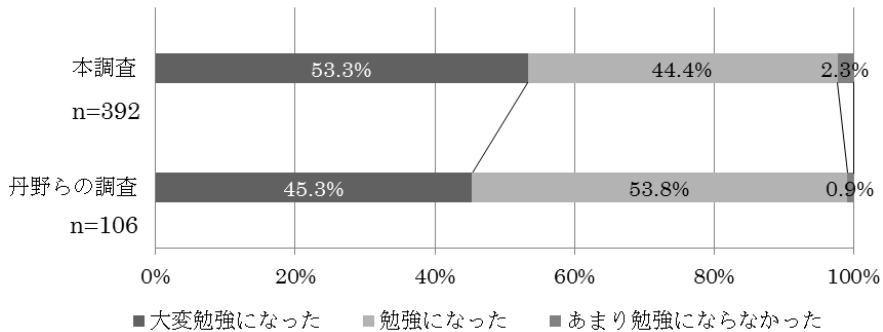


図 11 現場体験の全体的な成果

表 3 現場体験の全体的な成果と課題設定の有無のクロス集計表

(人)

	課題設定		合 計
	あり	なし	
大変勉強になった	149 78.4%	41 21.6%	190 100.0%
勉強になった	87 53.0%	77 47.0%	164 100.0%
あまり勉強にならなかった	3 37.5%	5 62.5%	8 100.0%
合 計	239 66.0%	123 34.0%	362 100.0%

現場体験後の社会福祉を学ぶ意欲の変化

現場体験後の社会福祉を学ぶ意欲の変化については、341 人 (86.8 %) が「非常に意欲は高まった」「どちらかといえば高まった」と回答しており、丹野らの調査 (2004 : 144) と同様、現場体験により 8 割以上の学生が学習意欲の高まりを感じていた (図 12)。

社会福祉を学ぶ意欲の変化の有無と体験施設数との関係

現場体験後、社会福祉を学ぶ「意欲に変化あり」群と「意欲に変化なし」群の二群に分け、比率の比較についてカイ二乗検定を用いておこなった。体験施設数を「2 か所」と回答した人の比率は、「意欲に変化なし」群に有意に多かった ( $p < 0.01$ )。なお、「意欲に変化あり」群で体験施

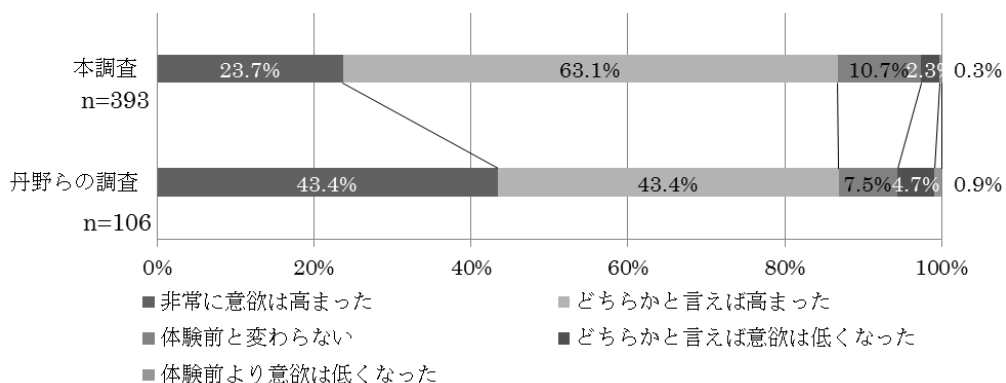


図12 現場体験後の社会福祉を学ぶ意欲の変化

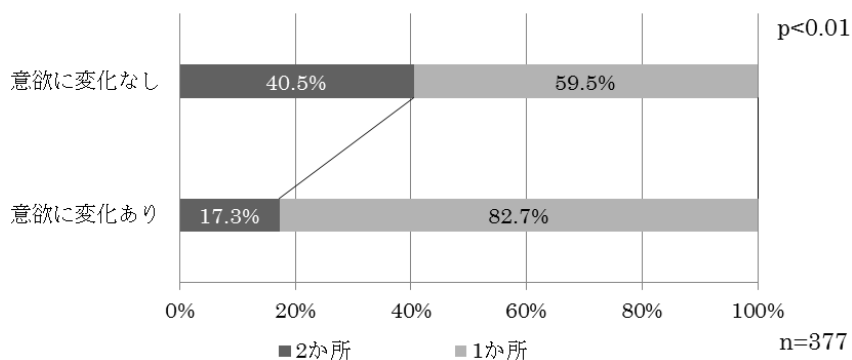


図13 学習意欲の変化の有無と体験施設数との関係

設数を「2か所」と回答した人の比率は17.3%であったのに対し、「意欲に変化なし」群は40.5%であった(図13)。

社会福祉を学ぶ意欲の変化の有無と課題設定の有無との関係

と同様に現場体験後、社会福祉を学ぶ「意欲に変化あり」群と「意欲に変化なし」群の二群に分け、比率の比較についてカイ二乗検定を用いておこなったところ、「課題設定をしなかった」と回答した人の比率は、「意欲に変化なし」群に有意に多かった(p<0.01)。「意欲に変化あり」

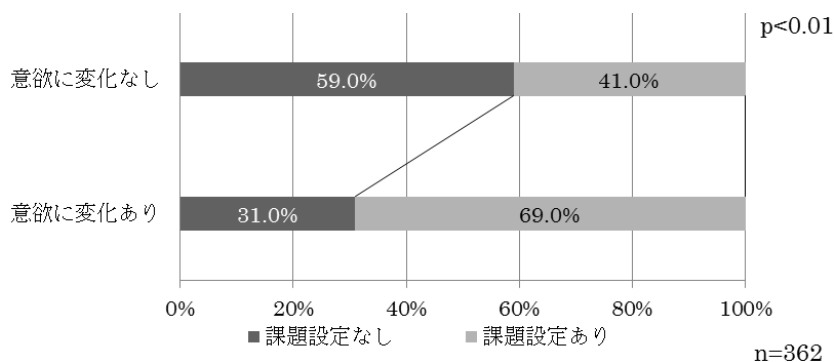


図14 学習意欲の変化の有無と課題設定の有無との関係

群で「課題設定をしなかった」と回答した人の比率は31.0%であったのに対し、「意欲に変化なし」群は59.0%であった(図14)。

#### 4. 考察

本研究の結果から、2日間の現場体験学習であっても、多くの学生は現場体験による成果を感じていることが明らかになった。それと同時に、現場体験先の選定、実施にあたっての依頼交渉、現場体験の実施などの各場面において、学生はさまざまな困難を抱えていることも明らかになった。ここでは、これらの結果から考察される今後必要な教育的支援について述べる。

##### 1) 現場体験学習を推進させる方法の検討

社会福祉士になることを志望している学生であっても、相談援助実習前年度の前期の時点では、継続して高齢者・障害者(児)・児童とかかわるボランティアをおこなっている学生は全体の2割に過ぎず、3割弱の学生は、そのようなボランティアを過去一度も経験していないことが明らかになった。ボランティア未経験者の割合は、宮嶋(2008:93-94)の調査では「1年生21.5%、2年生20.7%」であり、これと比較しても、本調査の結果は上回っていることになる。日本福祉大学では、さまざまな福祉系ボランティアサークルがあり、学生ボランティアを募集する掲示が学内に常にされている。大学入学後、さまざまな福祉現場に触れる機会があるにも関わらず、自らそこへ踏み込まなければその機会に恵まれることはない。本調査の現場体験に対する意見・要望の自由記述欄には、現場体験を強制することへの不満がある一方、現場体験という学習の機会を与えられることについて好意的に受け止める意見があった。9割以上の学生が現場体験を「勉強になった」と評価し、8割以上の学生が「社会福祉を学ぶ意欲が高まった」と回答していることを考えると、強制的にでも、福祉現場に触れ、自身の進路や適性について考えるこの現場体験の意義は大きい。

川廷(2006:143)は、社会福祉専門職養成教育という専門課程を前提とした初年次教育に求められることとして、社会福祉サービスに関する具体的なイメージを修得させ、かつ、そこでの専門職への志向性を強め、学習動機を強化することを挙げている。社会福祉サービスのイメージを修得するための教育方法は、さまざま考えられるが、現場体験学習は、講義形式の一方的な学習と異なり、相互のやり取りによる双方向的でかつこれまで学んできたことの統合的な学習であるため、社会福祉士としての実践力を身につけるという意味でも非常に有効な教育方法であると考えられる。社会福祉士養成教育の全体像を見据えながら、自発的な現場体験学習ができない理由を探るなどして、現場体験学習を推進していくための方法に関する検討が必要である。

##### 2) 課題設定の見直し

多くの学生が困難さを感じていた利用者との関係づくりに関して、過去のボランティアやアル

バイトといった社会経験との関連が示唆された。荒木ら（2009：49）の研究においても、利用者との関係形成やかかわりの中で、関係がうまく取れない、その場に応じた適切な援助や対応ができないといったことの多くは、学生自身の知識や経験不足に起因するものであることが指摘されている。

学生自身の知識不足に関しては、これまで実施されてきた福祉現場で働く社会福祉士によるゲスト講義に加えて、現場体験先の調べ学習や現場体験先分野に関連する文献学習を授業計画に組み込むなどの工夫が必要であろう。

加えて、利用者との関係づくりに関して丹野ら（2004：143）の調査との比較で大差があったこと、現場体験後の学習意欲の変化と体験施設数とに有意差が認められたことなどを考えると、利用者との関係づくりの困難さは、学生自身の知識や経験不足によるものだけでなく、体験時間の短さにも起因していることが推察される。1年次における100時間以上の現場体験学習「基礎実習」を研究した荒木ら（2009：49）によれば、「実習初期の段階は、関係形成に向けて学生が様々な試行錯誤をおこなっている」時期であるが、現場体験のような2日間の現場体験学習では、その試行錯誤をおこなう時間的猶予がない。佐藤（2001：115）は、青年期における福祉教育実践としての体験学習について考察し、次のように述べている。「社会福祉を視点とする対人援助体験については、体験者と体験の対象者が、互いを理解し、尊重し合える対人関係づくりをとおして人間形成が図られるよう配慮する必要があり、互いを理解しない一方向からの取り組みは、体験学習ではなく体験機会にすぎない」。

相談援助実習前年度という段階において、現場体験という課題を「体験機会」とするのか、「体験学習」とするのか、今一度見直し、日数や時間、施設数など、その目的に応じた課題設定とすることが求められる。

### 3) 現場体験学習プログラムの開発

現場体験に関する困りごととして、多くの学生が「なにをしたらよいかわからない」ことを挙げていた。学生が「なにをしたらよいかわからない」状態になった理由としては、次のようなことが考えられる。現場体験の目的が3点あることで学習目標（ねらい）が分散化してしまっている。開講してまもなくの課題提示となっており、学生に課題の目的・意義が伝わっていない。現場体験の活動内容に関する具体例が挙げられておらず具体的なイメージがつかみにくい。

学生自身の学習目標（ねらい）が定まっておらず、具体的な自己課題を設定することなく漠然と実施してしまっている。学生が自主的に動くこと、指示がない状態に置かれることに慣れていない。

実習プログラムや実習計画書のある相談援助実習と異なり、現場体験学習は、その自由度の高さゆえ、学生を悩ませている現状があることが推察される。笹部（2000：42）は、高齢者福祉施設においてさまざまな学生の体験学習を受け入れてきた経験から、体験学習を送り出す側（学校）と受け入れる側（施設）との事前協議の重要性を述べている。そして事前協議のなかでも、特に

活動内容や活動手順・方法、活動の意味づけを具体化することで、受け入れ側の施設職員や利用者が体験学習に対して理解を示し、協力的になったことを報告している。本調査の現場体験に対する意見・要望の自由記述欄には、次のような記述があった。「現場体験先から『アルバイトとしてこの後も来てくれ』と言われてうれしかった」。誰かに求められていることに気づくこと、それがその人を動かす力になる。福祉現場の協力を仰ぎながら、自分が誰かに求められていることを、学生が深く実感できる現場体験学習プログラムの開発が必要なのではないだろうか。

## 5. 結 語

本研究から得られた主な知見は次の4点である。86.8%の学生が現場体験により学習意欲の高まりを感じていた。利用者との関係づくりに関して過去のボランティア経験との関連が示唆された。68.8%の学生が現場体験中に困ったことがあったと感じており、その理由として最も多かったのは「なにをしたらよいかわからない」であった。現場体験にあたり自己課題を設定することが、現場体験の成果を感じることにつながる可能性がある。

本研究の問題点および課題は次の4点である。日本福祉大学社会福祉学部の相談援助実習入門科目でおこなわれている「現場体験」を対象にした研究であり、得られた成果は一般化できないという限界がある。本研究は、相談援助実習入門科目における現場体験学習のうち、学生に課題として課している現場体験学習を研究対象としたにすぎず、「現場」のとらえ方によっては、現場体験学習の概念は相当広がるものと考えられる。現場体験に対する不安の軽減・解消に向けて、課題設定の見直しと履修生に配付する教材（手引き）の充実を図った。これらの効果について今後調査する必要がある。現場体験学習の現状について学生を対象とした調査から多くの示唆を得た。今後は、現場体験学習を受け入れる側を対象とした調査や、学生個々の学びをふりかえるインタビュー調査や課題レポートの分析などの方法も用いて、現場体験での学びがその後の社会福祉士養成教育にどのような効果をもたらしたのか、教育効果の高い現場体験学習のあり方について追及していく必要がある。

### 注

- 1) 現場体験学習および見学実習について、具体的にどのような位置づけのもとで、どのようなことをおこなうのか明確にされていない現状があるように考えられる。川上 (a2009 : 160) は、現場体験学習ないし見学実習の位置づけとして、各養成校で次のようなケースがあると整理している。現時点でまったく取り入れていない。事前訪問時の施設・機関見学を兼ねて位置づけている場合。あくまでも任意の自主的なボランティアとして位置づけている場合。相談援助実習指導のカリキュラムに位置づけ、契約に基づいて取り組ませている場合など。この川上の整理でいえば、日本福祉大学社会福祉学部でおこなわれている「社会福祉現場体験（ボランティア）」は にあたる。
- 2) 「ソーシャルワーク実習基礎指導」および「ソーシャルワーク実習基礎指導」は、日本福祉大学社会福祉学部独自の科目であり、社会福祉士指定科目ではない。
- 3) 「現場を知る（その1）」では、高齢者福祉分野のうち、特別養護老人ホームやそこで働く生活相談員

の業務を学ぶことを目的としている。

- 4) 「現場を知る (その2)」では、障害者福祉分野のうち、生活介護事業所やそこで働く生活支援員の業務を学ぶことを目的としている。
- 5) 「大学経由施設」は、大学の近隣にある施設と、全国にある日本福祉大学と提携を結んでいる社会福祉法人が運営する施設である。大学の近隣にある施設は、例年、現場体験の希望が集中することから、学生の希望を大学で取りまとめて現場体験の依頼をすることになっている。したがって、「大学経由施設」で現場体験をする学生は、現場体験実施にあたっての依頼交渉を直接おこなっていない。

(文献)

- 朝日雅也, 大塚真理子, 木下里美ほか (2001) 「フィールド体験学習の展開に関する検討」『埼玉県立大学紀要』(3) 83-89.
- 荒木剛, 山本佳代子, 通山久仁子 (2009) 「福祉専門職養成教育における現場体験のもつ意義 基礎実習履修学生の学びから」『西南女子学院大学紀要』(13) 41-52.
- 荒木剛, 通山久仁子 (2010) 「学生の対人援助観にみる現場体験の意義 基礎実習履修学生のインタビュー調査を基に」『西南女子学院大学紀要』(14) 17-27.
- 井上修一 (2006) 「社会福祉士に求められる能力をいかに育むか」『大妻女子大学人間関係学部紀要人間関係学研究』(8) 117-122.
- 大橋謙策, 田村真広, 辻浩ほか編 (2002) 『福祉科指導法入門』中央法規出版
- 小田心火, 大塚真理子, 朝日雅也ほか (2002) 「課題レポート分析によるフィールド体験学習の学び」『埼玉県立大学紀要』(4) 27-34.
- 加藤幸雄, 小椋喜一郎, 柿本誠ほか編 (2010) 『相談援助実習 ソーシャルワークを学ぶ人のための実習テキスト』中央法規出版.
- 川上富雄 a (2009) 「第9章 相談援助実習の仕組み」白澤政和, 米本秀仁編 『社会福祉士相談援助実習』中央法規出版, 160-186.
- 川上富雄 b (2009) 「第6章 実習指導方法論 実習教育プログラミング」社団法人日本社会福祉士養成校協会編 『相談援助実習指導・現場実習教員テキスト』中央法規出版, 148-204.
- 川廷宗之 (2006) 「社会福祉専門職養成教育における初年次教育の課題」『大妻女子大学人間関係学部紀要人間関係学研究』(8) 135-146.
- 川廷宗之 (2009) 『社会福祉系大学生を対象とした初年次教育プログラム開発に関する予備的研究』平成19年度科学研究費補助金(萌芽研究) 研究成果報告書, 大妻女子大学人間関係学部に.
- 木下里美, 大塚真理子, 朝日雅也ほか (2002) 「保健医療福祉学部1年次のフィールド体験学習の効果と実習施設の関連」『埼玉県立大学紀要』(4) 35-42.
- 笹部紀子 (2000) 「高齢者福祉施設における体験学習のあり方に関する一考察」『福祉教育・ボランティア学習研究年報』(5) 36-52.
- 佐藤陽 (2001) 「関係性に着目する青年期における福祉教育実践としての体験学習目的の明確化に関する考察」『福祉教育・ボランティア学習研究年報』(6) 114-135.
- 社団法人日本社会福祉士会編 (2008) 『社会福祉士実習指導者テキスト』中央法規出版
- 鈴木敏彦 (2008) 「第2章 社会福祉士養成教育における基礎教育のあり方」川廷宗之編 『社会福祉士養成教育方法論』弘文堂, 38-67.
- 高岡満, 相澤譲治編 (2011) 『ソーシャルワーク実習 養成校と実習先との連携のために』久美.
- 高木寛之 (2006) 「社会福祉士養成課程における福祉体験学習の現状と課題」『大妻女子大学人間関係学部紀要人間関係学研究』(8) 163-170.
- 丹野真紀子, 井上修一, 飛永高秀ほか (2004) 「ボランティア体験学習の現状」『大妻女子大学人間関係学部紀要人間関係学研究』(5) 133-148.
- 船津敦子 (2007) 「第5章2節 計画の実践」はじめての社会福祉編集委員会編 『はじめての社会福祉



実践から学ぶ社会福祉』ミネルヴァ書房，98-109.

宮嶋淳（2008）「社会福祉系学生の生活体験・学習活動・生活に関する一考察」『中部学院・中部学院短期大学部研究紀要』（9）89-98.

渡邊洋子（2005）「社会福祉実習における事前学習の意味」『大妻女子大学人間関係学部紀要人間関係学研究』（7）225-236.